高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
vol. 109
2025.6

リレー随筆

きかんしゃトーマスから見る英国と日本の機関車事情

廣田 琢也

読者の皆さんは「蒸気機関車」という単語を見ると何を思い浮かべるだろうか。高知をはじめ全国津々浦々を走った"デゴイチ"D51形蒸気機関車か。或いは比島交通公園に保存されている元お召機のC58形335号蒸気機関車か。もしかしたら2001年に土讃線を走った「土佐龍馬号」をけん引するC56形160号蒸気機関車を記憶している方も居られるかもしれない(実は同機は当館の動態保存車両である)。そして今回の主役である青色の機関車も候補に挙がるだろう。

青いボディに赤いライン、側面に大きく「1」と書かれたスタイルの「きかんしゃトーマス」は、我が国では1990年に初のテレビアニメシリーズが放映されて以降、瞬く間にファミリー層へ浸透し、今や知らない人はいない作品に成長した。その発端はイギリスの牧師ウィルバート・オードリーが息子クリストファーのために語り聞かせた機関車の話であり、1945年から「The Railway Series(邦題:汽車のえほん)」として発表された書籍である。今回、私共京都鉄道博物館からバトンを渡し、高知県立文学館で巡回展示される「きかんしゃトーマスの世界展～はたらく機関車たちのおはなし～」は、この原作の出版から80周年となることを記念した特別展示である。

本展の冒頭の様子を少しだけご紹介する。展示室に入ってまもなく、「The Railway Series」の第一作目である「The Three Railway Engines(邦題:3だいの機関車)」の原画が目に入る。ここで大多数の方は奇妙な感覚を覚えるだろう。なぜなら、トーマスはこの話に登場しないからである。実はこの"3だい"とはエドワード、ヘンリー、ゴードンのことであり、トーマスは第二作目の「THOMAS THE TANK ENGINE(邦題:機関車トーマス)」から登場するのだ。トーマスが原作で二番手に登場するにも関わらず作品全体の代名詞となったのは、愛くるしい姿のタンク機関車(炭水車を持たず、直接水と石炭を搭載する小型蒸気機関車)でキャラクター化されたからではないだろうか。ちなみに、トーマスの名付け親が作者の息子クリストファー・オードリーであるというのは、トーマスファンには知られた話である。

京都鉄道博物館の扇形車庫へ"出張"しているトーマス　©2025 Gullane (Thomas) Limited.

さて、我が国で「きかんしゃトーマス」が定着した理由は、英国との共通点がいくつかあるからではないかと考えている。その中で、両国とも島国で鉄道は他国にあまり影響されず独自の進化を遂げていること、そしてどちらも現在に至るまで営業線上で蒸気機関車の動態保存を続けていることは、特筆すべきことだろう。我が国ではJR山口線の「SLやまぐち号」(この列車をけん引する蒸気機関車も当館の動態保存車両である)や大井川鐵道の「きかんしゃトーマス号」などが活躍している。英国では今日も蒸気機関車が豪華列車「British Pullman」の先頭に立っている他、2010年代までロンドン地下鉄でも動態保存の蒸気機関車が走れるように整備していたのは、驚くべきことであろう。

この様に、我が国と英国の様子も思い浮かべながら本展をご鑑賞いただくと、作品に対して理解がより深まると思う。本展を堪能された後は、そのまま特急「南風」と新幹線を乗り継いで当館までお越しいただき、ソドー島から当館の扇形車庫へ"出張"しているトーマスに是非とも会いに来ていただきたい。

(京都鉄道博物館 学芸員)

次回開催

© 2025 Gullane (Thomas) Limited.

企画展

原作出版80周年

きかんしゃトーマスの世界展

はたらく機関車たちのおはなし

令和7年 7月5日(土)〜9月15日(月祝)

日本でも長年親しまれているテレビアニメ「きかんしゃトーマス」の原作『The Railway Series(汽車のえほん)』シリーズの第1作目『The Three Railway Engines（3だいの機関車）』が1945年に誕生して、今年で80周年を迎えました。

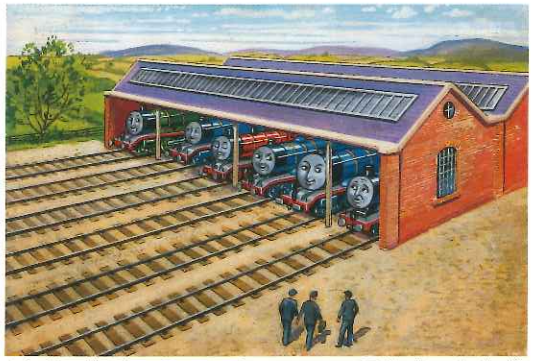
エドワード、ゴードン、ヘンリーの3台ではじまった絵本は1年に1冊のペースで新しい物語が紡がれ、第2巻でトーマスと、ジェームスが登場し、3巻で緑色の小さなタンク式機関車パーシー、7巻では箱型の路面機関車トビーが登場するなど、巻を追うごとに機関車の仲間たちが増えていきました。

機関車たちは、いばりんぼうやいたずらっこ、気難し屋だったりいじわるだったりと、人間顔まけの豊かな表情で躍動し、様々な失敗や事件を巻き起こしながら鉄道を走り回ります。

作者のオードリー牧師は1972年刊行の26巻『Tramway Engines（わんぱく機関車）』で筆をおきますが、以降は息子のクリストファーが引き継いで物語を紡ぎ、『The Railway Series（汽車のえほん）』シリーズは、本国では42巻まで刊行され、人気絵本として長年親しまれています。

日本国内では長らくオードリー牧師の26巻までしか邦訳がありませんでしたが、2023年に27巻『Really Useful Engine（本当にやくにたつ機関車）』が、今年3月には28巻『James and the Diesel Engines（ジェームスとディーゼル機関車）』が発刊されるなど、新たな盛り上がりをみせています。

原作出版80周年を記念した本展では、『The Railway Series（汽車のえほん）』シリーズの原画約100点のほか、オードリー牧師による手書きの草稿「エドワードのたのしい1日」など原作絵本の貴重な資料を多数展示。80年の時を経たとは思えない色鮮やかな色彩を残した原画に目を奪われることはもちろん、小さな紙に書かれた、息子への愛情にあふれるオードリー牧師手書きの草稿に心奪われることでしょう。


▲「3だいの機関車－エドワードのたのしい1日」の原画／レジナルド・ダルビー

テレビアニメ撮影用の模型展示では、トーマスたち機関車とともに駅舎や石炭置き場、信号詰所などのジオラマ模型が展示され、今にも走り出しそうな様子をみせています。

さらには、ソドー島のジオラマには物語のシーンが散りばめられており、俳優の板垣李光人さんの朗読で物語を楽しむことができるほか、インタラクティブ作品では、自由につなげた木製線路の上をトーマスたちが走り出す、たのしい仕掛けも用意されています。

小さい頃トーマスの物語に目を輝かせた大人も、今まさにトーマスに夢中になっている子どもたちも、この夏は文学館にぜひ遊びにきてください。

（学芸課／岡本美和）

好評開催中
レポート

花咲くモダンデザイン

～大正イマジュリィの世界～

令和7年 4月5日(土)≫6月15日(日)

現在、当館では春の企画展として大正時代の出版文化の魅力を伝える展覧会を開催しています。

展示室には藤島武二、橋口五葉、富本憲吉、岸田劉生ら日本近代美術史でも重要な作家や、竹久夢二、高畠華宵、蕗谷虹児ら抒情画家として一世を風靡した作家、また日本グラフィックデザイナーの先駆者として知られる杉浦非水や、熱心な愛好者を持つ小林かいちなど、豊穣なデザイン力と感性を武器に大正時代の大衆文化を牽引していった画家、版画家、挿絵画家、工芸家たちの作品603点を展示しています。

これらの資料は本展監修者である故山田俊幸氏（元・帝塚山学院大学教授）の膨大なコレクションによるものです。開幕2日目には山田氏との共著もある郡山市立美術館の永山多貴子館長が来高。氏の思い出を交えつつ、分かりやすく「大正イマジュリィ」とは何か、その魅力を解説してくださいました。また、会期中は展示を観ながらクイズを解くイベントや、花の形をしたぼんぼりにビーズを通してライトを作る工作イベントなどを実施、多彩な方面からモダンな時代を楽しんでいます。

記念講演会の様子

展示の様子

展示されている作品をじっくり見ていくと、100年以上前とは思えない印刷の鮮明さに驚くとともに、本の見返しやマッチ箱など、細かい部分にまで趣向を凝らしている当時の人々の美意識の高さに驚かされます。

前回の館報でも触れましたが、日本では明治に活版印刷が実用化され、新聞、雑誌、書籍などの「活字メディア」がその種類や発行部数を増やしていきました。大正時代はさらに演劇、映画、音楽の普及に耽美、抒情、前衛といった感覚的な要素が加わり、印刷文化の黄金期ともいわれています。昭和になってテレビの登場、平成から令和にかけてデジタル産業の台頭により、出版不況や活字離れが心配されている現在ですが、そんな今だからこそ、印刷物ならではの人を惹きつける力を存分に楽しんでいただきたいと思います。

6月15日（日）まで開催しており、最終日には同じ時代に活躍した寺田寅彦の蓄音機を聴くイベントもありますので、ぜひお越しください。

（学芸課／福冨陽子）

高知の「大正」を紹介するコーナー

橋口五葉装幀・吉井勇著『毒うつき』（部分）1918（大正7）年

報告

いなかずまいは至極無事ぢゃ

～漢詩文をたのしむ五山文学展～

朝倉和先生の記念講演会のようす

高知の文学史において、五山文学は土佐人による文学として最初に来るものですが、これまで紹介の機会が非常に少なかった現状があります。

令和六年度末に開催した展覧会「いなかずまいは至極無事ぢゃ～漢詩文をたのしむ五山文学展～」では、広く一般の方に知ってもらえるように吸江寺の貴重な資料や津野町の埋蔵品なども紹介し、あまり知られていない義堂・絶海ゆかりの地の文化の豊かさを紹介しました。また、文学館らしく彼らの和歌や漢詩文作品から有名なもの、土佐を詠んだものなどを中心に紹介。高知県内の書道部の高校生などに書にしてもらい展示をしました。漢詩のリズムの美しさや格調の高さに親しみを持ってもらえるよう日本語と中国語で朗読し、YouTubeでも聴けるようにしたことも評価されました。新聞にも何度か取り上げていただき、また関係者の方が熱心に勧めてくださったこともあって、じわじわと反響が広がっていった展覧会となりました。

文学散歩　津野町郷土資料館の田中学芸員と共に津野町をめぐるようす

初日のお茶イベントに始まり、大盛況だった朝倉先生の記念講演会や、五台山・津野町をめぐる文学散歩、おはなしと写漢詩、漢詩や詩吟の教室、朗読の会などさまざまなイベントを行いましたが、どのイベントも参加者の方から楽しかった、勉強になったと声をかけていただけて、とても温かい気持ちになりました。こうしたイベントを通じて、五山文学に関わりのあるさまざまな人たちと縁を結ぶことができましたので、今後も五山文学について研究を深め、皆さんに還元できるよう努力したいと思います。

これからも、あまり知られていない分野も含めて丹念に光を当て、多くの皆さんに高知県の文学の魅力を再認識いただくことができればと考えています。

（学芸課／川島禎子）

宮尾文学の世界室

展示入れ替えのご案内

「宮尾登美子の本棚」

太宰治賞を受賞した『櫂』を皮切りに、『寒椿』『一絃の琴』『序の舞』『天璋院篤姫』『宮尾本平家物語』など、数々の名作を世に出した作家・宮尾登美子。

その確かな情景描写と人物造形、流麗な文章表現はどのように培われたのでしょうか。

特定の文学団体には所属せず、独学で道を切り拓き一家をなした宮尾登美子は、どのような本を読み、どう咀嚼し、どのように描いたのか。

本展では、日記、エッセイなどを紐解き、作家への道程を追いながら、宮尾登美子が愛読した本の数々をご紹介します。

終戦後満洲から引き揚げ、農家の嫁として慣れない農業に従事していた宮尾は結核に罹患。死をも覚悟し、娘に満洲での体験を残そうとノートを書きはじめたことが作家への第一歩でした。

すぐには満洲のことは書けず、日々のことを綴ったその内容からは、病いと農村の因習に苦しむ生活の中で「書きたい」「読みたい」という文学への情熱にあふれる若き日の姿を感じることができます。

本を手に入れることすら容易ではない時代、書籍の名前が多くみられるようになるのは昭和28年の日記から。中村光夫『風俗小説論』、横光利一の『純粋小説論』などの文学論や大岡昇平の『武蔵野夫人』などを読んだことがうかがえます。

強い感銘を受けた谷崎潤一郎の『細雪』、心のよりどころともなった林芙美子の『放浪記』、上京後読み耽った円地文子作品や井上靖全集など、先人たちの遺した文学作品と真摯に向き合う、文学修行としての読書体験は宮尾の血となり肉となり、大きく羽ばたいていくための道しるべともなりました。

本展では、これらの本を紹介するとともに、大作『クレオパトラ』上下巻及び『宮尾本平家物語』執筆のために収集した参考書籍群を一堂に展示。「作家の本棚」を垣間見ることができる展示になっています。

宮尾文学の世界室「宮尾登美子の本棚」は来年3月22日まで開催。来年は宮尾登美子生誕１００年の記念年にあたります。この機会にぜひ宮尾文学の世界に触れにお越しください。

（学芸課／岡本美和）

108

土佐文学さんぽ

Tosa Literature Walk

さまざまな視点で高知の文学にゆかりのある場所を紹介する「土佐文学さんぽ」。93～108号まで郷土史家の谷是さんに執筆いただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

なお、今号より当館職員が各地に赴き執筆いたします。

『土佐日記』出立の地

『土佐日記』の著者である紀貫之（？～945）は平安時代前期の貴族です。官職には恵まれていませんでしたが、歌人として名高く、「仮名序」でも有名な『古今和歌集』の撰者を務めました。

紀貫之は延長8（930）年から承平4（934）年まで土佐の国司をつとめます。貫之が土佐に赴任する約60年前には、同じ「紀」の氏である紀夏井が「応天門の変」に縁座し、土佐に遠流となっています。この事件は紀一族のその後に影響し、貫之の官位が低かったのもそのためだとされています。

貫之が国司として働く国衙が置かれていたのが、現在の南国市比江でした。「土佐国衙跡」の標柱がのどかな田園の中に立ち、周辺には高浜虚子の句碑などもあります。その中の「土佐日記の碑」には、「みやこへとおもふをものかなしきはかへらぬひとのあればなりけり」「さをさせどそこひもしらぬわたつみのふかきこころをきみにみるかな」の二首が刻まれています。京で生まれ、土佐へ伴ってきたものの亡くしたわが子を悼む歌と、貫之との別れを惜しむ人々の情の深さを海になぞらえて詠んだ歌です。

『土佐日記』でこの地は「住む館より出でて、船に乗るべきところへ渡る」と単なる出立の地としてあっさり描写されています。大津へ出発したのは12月21日ですが、25日に新任の国司に招かれ、わざわざ国衙へ戻っている描写もあり、管弦などの宴を「とかくあそぶようにて」と皮肉な調子で描いています。

あたりには永源寺や日吉神社、国分寺があり、歴史深い地であることがうかがえます。

なお、土佐の史料集『皆山集』には「信疑談云紀貫之姫君の墓国分寺境内ニあり」という記述がありますが、現在国分寺にそのような伝承は残っていないようです。

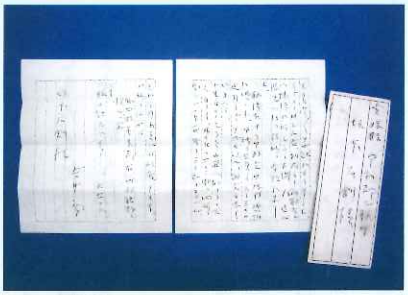
子どもたちの遊ぶ声と田んぼを流れるコポコポという水音が心地よいこの地で、貫之はどのような暮らしを営み、京への望郷の他何を考えていたのか、日記に描かれていない分想像が膨らみます。

（学芸課／笠岡花菜子）

土佐日記の碑

資料受贈報告

寄贈資料から



坂本石創宛 吉井勇書簡
昭和11（1936）年8月26日付
ペン書
宇都宮泰然氏寄贈

右の書簡は、吉井勇［明治19～昭和35（1886～1960）］が旅先の愛媛県西宇和郡三瓶町（現西予市）で世話になった小説家、坂本石創［明治30～昭和24（1897～1949）］に送った礼状です。発信地は後日滞在した今治市。消印が切手とともに消失しており、正確な年月は不詳ですが、本書簡とともにご寄贈いただいた昭和11年の石創宛葉書2通に続くものとみられます。それらはいずれも歌行脚中の絵葉書。1通は7月17日消印、長崎から出されたもので、来月三瓶を訪ねることを通知。もう1通は8月6日消印、宇和島市発信で、九州から四国に渡り数日中に参上する旨を知らせています。

「歌行脚短信」（『相聞居随筆』所収）によると、勇は昭和11年4月10日に高知県猪野々の草庵、渓鬼荘を出発。四国から瀬戸内の島々を経て中国、九州と巡った後、海路で四国に渡り、8月10日三瓶に到着。「この地の旧知坂本石創君は、嘗て田山花袋氏の門にありて、専念創作に従ひしことあり。迎へられて海岸の静かなる客舎に入る」とあり、1週間ほど同地に滞在しています。

写真の書簡は、この滞在中の厚情に謝意を表すとともに、その後の旅程を知らせたものとみられ、三瓶を発ってから再び九州に渡って阿蘇に登山、八幡浜に戻って大洲、道後温泉に泊まり今治へ来たこと、月末までには渓鬼荘に帰ることを伝え、住所を記しています。

勇が歌行脚を終え、渓鬼荘に帰ったのは昭和11年8月28日。後年、勇は五十路でのこの長旅について「一世一代と言ってもいい最長期で最広範囲にわたる旅行」（『私の履歴書』第8集）と述べています。本書簡は、その終盤の足跡を伝える貴重な資料として注目されます。

（学芸課／小松路代）

受贈報告

（令和7年2月～4月）敬称略

▼中脇初枝・「天までのぼれ　中脇初枝著　ポプラ社刊」
▼木村哲也・「大江満雄セレクション　大江満雄著　木村哲也編　書肆侃侃房刊」
▼湯浅篤志・「赤い塔の家　森下雨村著　湯浅篤志編　ヒラヤマ探偵文庫刊」
▼橋田憲明・「橋田憲明句集　橋田憲明著　文學の森刊」他
▼駒木基克・「句集　足摺岬　復刻版　橋田憲明著刊」他
▼山形敬介・「詩文誌　GUILTY　50号　ギルティ編集局編刊」
▼楠本雅弘・「農民文学　338号　日本農民文学会編刊」
▼近代作家旧蔵書研究会・「近代作家旧蔵書研究会年報3号　近代作家旧蔵書研究会編刊」
▼文藝春秋・「週刊文春67巻12号　竹田　聖編　文藝春秋刊」
▼イカロス出版・「文学館を旅する　全国の作家・作品ゆかりの地をめぐる　今村信隆監修　イカロス出版刊」

このほか、全国の個人・関係機関の皆様から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申しあげます。

開講中です

文学マイスター講座

高知県立文学館では今年度も文学マイスター講座を開催しています。多くの受講申込みをいただき、ありがとうございました。

秋の企画展や常設展企画コーナーで歌人の北見志保子を紹介していることもあり、「詩歌を学ぶ」がテーマです。

映画「千と千尋の神隠し」主題歌「いつも何度でも」の作詞ほか、様々な作詞活動や著書で知られ、昨年亡くなった谷川俊太郎さんと親交があった覚和歌子さんをはじめ、各分野でご活躍中の講師の皆様にご講義いただきます。後半には高知出身の北見志保子、若尾瀾水、大原富枝の作品やその人生を学ぶ回もありますので、ぜひご注目ください。全9回の講座を通して、短い字数で私たちの心を掴む詩・俳句・短歌の魅力に触れていただければと思います。

文学マイスター講座は県外の講師の話をきける貴重な機会でもあり、好評をいただいています。事前申込み制ですが当日参加いただける場合もありますので、文学マイスター講座担当までお問合せください。

令和6年度文学マイスター講座認定証を授与しました

昨年度は「王朝文学を学ぶ」をテーマに開講しました。3月の講座終了後には、全9回すべてに出席された11名の方に、館長より文学マイスター認定証を授与させていただきました。

猛暑や寒さの厳しい日の開催もありましたが休むことなく出席され、『源氏物語』をはじめ王朝文学の学びを深められたことに敬意を表します。

今年度は何名の文学マイスターが誕生するのか、楽しみです。

（学芸課／笠岡花菜子）

第28回

児童生徒文学作品朗読コンクール参加者を募集します！

朗読は、表現のための意義ある教育活動として、小・中学校国語科の授業において取り組まれています。当館でも、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年児童生徒文学作品朗読コンクールを開催しており、今年で28回目を迎えます。

朗読することを楽しみ、より深く作品世界を理解することは、子どもたちに大きな喜びをもたらします。聴く相手に想いを届かせることができたとき、文学作品の魅力はさらに高まっていきます。ぜひ多くの子どもたちに参加していただきたいと考えています。

なお、県審査（11月）の特別審査委員には、子どもたちに大人気の絵本作家、宮西達也氏をお迎えします。宮西氏による記念講演会も開催予定ですので、こちらもぜひご注目ください。

（学芸課長／織田敦子）

地区審査

西部 8月13日(水)午前10時30分～
大方あかつき館
レクチャーホール

東部 8月22日(金)午前10時～
田野町ふれあいセンター
多目的会議室

高知 8月24日(日)午後1時～
8月25日(月)午前9時30分～
高知県立文学館
1階　ホール

※高知会場は多数の参加が見込まれるため2日間を予定

県審査

11月2日(日)午後1時～
高知県立文学館　1階　ホール

※各地区審査より選出された児童生徒が県審査に出場します。

※特別審査委員として、宮西達也氏（絵本作家）をお招きします。

申込み期間及び応募締切り

令和7（2025）年6月9日(月)から7月4日(金)まで

※当日消印有効

※詳細は当館ホームページの募集要項をご覧ください。

ショップより

木々の鮮やかな緑色の中に赤や青色などの紫陽花も咲き始め、夏の気配と共にそろそろ梅雨入りも近くなってきました。

当館では、企画展「花咲くモダンデザイン～大正イマジュリィの世界～」が開催中で、たくさんのお客様にご来館頂いています。

2階ロビーには、レトロな衣装などが飾られていて大正時代の雰囲気を感じられる空間となっています。

ミュージアムショップでは、小林かいちや竹久夢二、杉浦非水、橋口五葉、水島爾保布などのモダンでおしゃれなデザインのポストカード、図録やクリアファイルといったオリジナルグッズや関連書籍を多数取り揃えておりますので、当館にお越しの際には是非お買い物もお楽しみください。

次回企画展「きかんしゃトーマスの世界展」では、トーマスやその仲間達のグッズを販売する予定です。

（総務事業課／山﨑幸乃）

館長エッセイ

「尚新」の心をいつまでも

澤田　博睦

「迷子になったら、あちこち行きまわったらいかんよ。」という言いつけを守って、幼い私は大勢の人が行き交う広場の真ん中でずっと突っ立っていました。かつての大阪万博でのこと。水飲み場の長い長い列に並び、ようやく飲めた頃には同じツアーの知った顔が周りに誰一人いなかったのです。

あれから随分年月が経ち、それなりに成長したので今度は「迷子になるわけない！」と言いたいのですが、老眼も進みスマホ決済に奮闘している間に仲間とはぐれそう…。

大阪・関西万博は、各国や各企業のパビリオンも魅力的ながら、一帯を縫うように廻る世界一の木造建造物「大屋根リング」もぜひ見たいものです。4割ほど高知県の木材が使用されていると聞くと親近感が湧きます。また、日本館には藻からイスを作る研究所があるらしい…、と聞くと???ですが、未来にはプラスチックに代わる物質が発見されているのでしょうか？

かつて大阪で勤務をしていた頃、ちょうど花博があって毎日のように通ったものですので、大阪・関西万博も会場の近くに住んでいたら、きっと知人の案内にかこつけて何度も何度も足を運んだことでしょう。

もっとも、大都市にお住いの方は、何々トレードショーや何々見本市のように、常にいろいろなジャンルで新商品や最新技術の展示会が開催されていますし、今やVRなどデジタルで疑似体験できるものも多いので、現地での体験にさほどの鮮度を感じないかもしれませんね。

私はといえば、テレビの特集やSNSなどで煽られると、やはり子どもの時のワクワク感が呼び起こされてしまいます。きっとのどかな田舎暮らしに慣れているからこそ、物珍しさを求めたくなるのでしょう。これまで知らなかった新しい知識や経験が得られると信じ、齢を重ねても、なお、知的好奇心が勝ります。昔の文物や制度を貴ぶ「尚古」ならぬ「尚新」も亦良しです。

「尚」

新職員の紹介

4月からご縁がありまして、文学館で勤務させていただくことになりました。

文学的なものに触れる機会があまりないまま日常を送ってきましたので、忙しい日々の中でも、折りに触れて文学に馴れ親しんでいる方々に尊敬の念を抱きます。

そんな乏しい読書経験の中でも、何かの折に一場面を思い出すといっぺんに記憶の扉頁が開いて、その時の感動や読んでいた本の匂い、天気や湿度まで甦ってくることもあり、本当に不思議な思いがします。貴重な機会ですので、皆様と文学の橋渡しのお手伝いが出来るように努力したいと思います。

（学芸課/岩根令以子）

高知県立文学館ニュース　第109号　令和7年6月2日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX 088-871-7857

高知県立文学館カレンダー

6月15日まで好評開催中

花咲くモダンデザイン

～大正イマジュリィの世界～

- 会　期　令和7年 4月5日(土) ≫6月15日(日)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　600円（常設展含む）長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。

6月23日（月）～6月25日（水）メンテナンスのため臨時休館致します。

次回開催

原作出版80周年

きかんしゃトーマスの世界展

はたらく機関車たちのおはなし

- 会　期　令和7年7月5日(土) ≫9月15日(月祝)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　600円（常設展含む）
  長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

©2025 Gullane (Thomas) Limited.

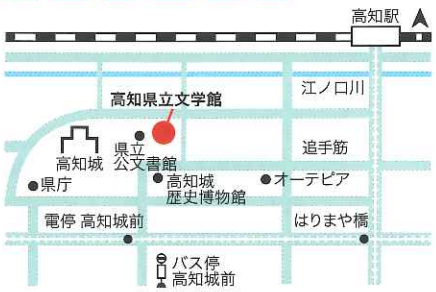
子どもたちも喜ぶ多彩な関連イベントも開催！

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日　年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休
※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
観覧料　企画展開催期間（常設展含む）…企画展ごとに異なります。
企画展を開催していない期間（常設展のみ）…一般400円
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、
高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
（窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります）
駐車場　なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
附帯設備　ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室
運営　公益財団法人　高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分
  （またはバス・路面電車を利用）
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」
  下車、徒歩20分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館 検索